

# 長崎県の美しきまちづくり 対馬編

皆さんはヒトツバタゴという木をご存知でしょうか。春に白い花を咲かせるモクセイ科の落葉高木で、限られた地区でしか自生していない希少種です。今回ご紹介する対馬の鰐浦は、三千本が自生する国内最大の群生地で、国の天然記念物にも指定されています。



鰐浦集落(景資第1—3号)

さて、対馬市の主島である対馬島は89%が山林で、山々が海まで迫る地形となっています。万関瀬戸をはさみ上島と下島に分かれています。上島の集落のつくりには特徴があります。山裾に立ち並ぶ民家に囲まれて、高床倉庫が林立しているのです。この倉庫、床下1m程も

ある正に高床倉庫で、海からの強風や湿気・火事から大切な食料や仕事道具などを守るため、民家から少し離れた道路沿いの低地を住民の共有地とし、各家が倉庫を建てています。こういった集落の形態や建物の配置は全国的に珍しく、これが最も良く残っているのが鰐浦集落です。他にも紺碧の海と段々畑のコントラストが美しい青海の里や、入り江の奥に位置し、穏やかな海に面する志多留集落などにも、同様のつくりが見られます。



青海の里(景資第1—9号)



志多留集落(景資第1—10号)

一方、下島の厳原は、対馬藩主宗氏の城下町として栄えました。武家屋敷や連なる石垣など、特徴ある落ち着いたまちでしたが、高度経済成長期頃になると、開発によりかつてのまちなみは徐々に姿を消していきました。

そんな中、持ち上がった県道の拡幅計画は、住民がまちづくりを考えるきっかけとなります。古いまちなみを守りつつ、新しい機能も兼ね備えたまちづくりをしたいという思いのもとに、住民・専門家・行政職員が集まりました。県道沿いの大町地区と武家屋敷通りの中村地区でそれぞれ20回以上のワークショップが重ねられ、それぞれの地区でまちづくりのルールを定めた住民協定が結ばれました。厳原の例は、まちづくりが住民の参加を経て行われた初期のもの

です。これらの地区では今でも住民の方々により、まちづくりが進められています。新しいまちなみ



大町地区(上)と  
中村地区(下)

と古くからの集落が共存する対馬には、個性的な建造物も数多く残っていますが、今回は「源泉混々」をご紹介します。一風変わった名前ですが、実は河川の分水施設です。明治時代後期に、氾濫しやすい阿須川を2方向に分ける河川改修が行われ、川の水量を適宜分けるための分水施設がつけられました。厳原中心部の北のはずれにあり、なかなか探し出すのが難しい場所にあります。今も現役です。

もうすぐやってくる夏は、島のベストシーズン。歴史・アウトドア・食と様々な楽しみ方ができる対馬で、あなただけの「島の楽しみ方」を見つけてみてください。



源泉混々  
(景資第2—14号)

